

やまとの名品

天理図書館

新編古今事文類聚前集卷之三十二

退隱部

建安祝穆和父編

閑退

群書要語

吾不知所為行不知所之含哺而熙鼓腹而遊莊子進不入以離尤兮退將脩吾初服楚詞製黃荷以為衣集芙蓉以為

策同上閑居可以養志詩書足以自娛梁陳傳絕意乎寵榮之事潘岳賦鄭中愚行袖手版付丞相不待彈劾還耕桑韓解組便為寒處士輕箠短笠伴春鋤歐有時醉倒卧溪石青山白雲為枕瓦花間有鳥喚不覺日落山風吹白醜歐

醉尉見呵

しんべん ここん じぶんるいじゅう
新編古今事文類聚

しゅうこう
壽光将来本

天順期(1457~64)刊 20冊

縦25.6cm 横15.5cm

宋代の祝穆が、唐の歐陽詢撰『芸文類聚』にならい、群書の要語（要点）や古今の事実と詩文を拾い集めて、部門ごとに分類編纂した類書（百科事典）である。後に元の富大用と祝淵がそれぞれ補編した。掲出本は、祝淵補編の遺集十五巻を欠く二百二十一巻本で、別集巻二十四末丁裏には刊記「書林明實堂重新刊行」があり、明代天順期（一四五七〜六四）の建陽書林明實堂の刊行と断定できる。

古来、日本には様々な漢籍（中国人の著作による典籍）が伝来し、政治・制度の手本となり、日本人の教養や精神に多大な影響を及ぼしてきたが、日本人が漢文の内容を理解するのは、容易いことではなかった。漢字の知識は不可欠であるが、中国へ留学できる者は稀であり、ほとんどの日本人は、不明な漢字や事柄を辞書や類書で調べながら、ひたすら読書を繰り返すしかなかく、辞書や類書は読書に欠かせぬものとなった。

掲出本の巻末には外交僧と思われる釋壽光（生没年不詳）の天文二十二年（一五五三）識語があり、本書を天文十四年（一五四五）入明の際彼の地で求め帰朝したとある。日本と明国の交易は、十年に一度と定められた遣明船による勘合貿易に限られていたが、壽光の交易船は正式の勘合貿易船でなかったため入貢が認められず、寧波付近で倭寇の王直（？〜一五五九）の誘いを受け、密貿易を行ったようである。王直は、天文十二年（一五四三年）、我が国への鉄砲伝来にも大きく係わったとされる人物であり、外交僧壽光と倭寇王直の接触は、荒海を往來した二人の思惑が交錯する人間模様を想起させる。

（天理図書館 吉成伸仁）

